

## 〈2020 年度企画の趣旨〉

「枢要徳 (virtutes cardinales)」, すなわち思慮 (賢慮)・正義・勇気・節制の四つの主要な徳を巡る研究は, 中世哲学研究の中でも近年大きな進展を見せている領域の一つである。前世紀中葉の Delhaye や Gauthier, Lottin らの研究は, 近年になって, 中世全体を視野に収めた István P. Bejczy による『中世における枢要徳——4 世紀から 14 世紀の倫理思想の研究』(2011) や 13 世紀に焦点を絞った Rollen E. Houser の『枢要徳——アキナス, アルベルトゥス, 総長フィリップス』(2004) 等によって更新され, 教父思想や中世思想への枢要徳の伝播について一定の見通しを描くことができる下地が徐々に形成されつつある。

枢要徳は古代ギリシアに起源を持ちながらも, 信仰・希望・愛徳という対神徳を補完するものとして教父時代から初期中世にかけて受容され, キリスト教的な人間像を考える上での基本的な枠組みを与えたと理解されることが多い。しかし, 時に司牧的な伝統の中で, 個人の救済を妨げる悪徳や罪に対する効果的な治療法という観点から考察されるなど, 枢要徳への関心やその取り扱われ方は, 時代や思想家によって少なからぬ相違がある。

では, 古代ギリシア世界からキリスト教世界へと至る伝播の中で, キリスト教世界の思想家たちは, 枢要徳をどのような関心と共に受容し, その思想を展開させていったのか。本シンポジウム企画の第一の趣旨としてあるのは, こうした中世の枢要徳思想を巡る歴史研究という点である。

また枢要徳を始めとする徳倫理の思想は, 近代において台頭してきた義務論や功利主義によって次第に倫理学の傍流へと追いやられていった。しかしそうした近代道徳哲学が人間の行為そのものの性格や結果に焦点を当て, 行為する主体や行為者の視点を欠くものであることは度々指摘される点であり, この点をもとに行業者自身の在り方に定位する徳倫理の復権が時に要請される。その意味で, 中世における枢要徳思想の形成と展開を辿ることは, 徳倫理の役割の見直しという現代的な関心と連結し, その問題提起と検討材料を提供する上でも大きな意義を持つと言える。

シンポジウム企画チーム (藤本温, 松村良祐, 山田庄太郎) は, このような問題意識のもとで, 2 年連続企画として「枢要徳思想の形成と展開」を提案した。

2019年度は「教父時代における枢要徳の受容と形成」を課題として担い、キリスト教思想の内に枢要徳が根を下ろしていく過程に迫った。

プラトンに遡る思慮・正義・勇気・節制の四徳説が、アリストテレスや初期ストアの哲学者、新プラトン主義思想家たちの個々の理路に基づき新たな解釈を付され、変容、混淆していく姿を明らかにした土橋茂樹氏の連動報告で始まった2019年度のシンポジウムでは、アレクサンドリアのクレメンスの神学において四徳、とりわけ思慮がどのように位置づけられているかを明らかにした秋山学氏の第一提題、四徳に枢要徳の名を与えたアンブロシウスがキケロの徳論を基本的には受容しつつも信仰という新たな基礎の上にそれを据えようとする様を扱った山田庄太郎による第二提題、愛の秩序という独自の枠組みから神への愛の異なる現われとして枢要徳を捉え直すアウグスティヌスについて論じた菊地伸二氏の第三提題を通じ、大きく二つの事柄が明らかにされたように思われる。

一つは、教父たちが古代ギリシア・ローマの哲学伝統に遡る四徳の思想を「枢要徳」として受容していく、その在り方の多様性である。クレメンス、アンブロシウス、アウグスティヌスの三者は、聖書の内に枢要徳の基礎を見出そうとする点では共通しながらも、各々独自の解釈を見せている。もう一つは、そうした多様性をもたらしたのが、個々の思想家の固有の人間理解であったという点である。人間の本性をいかに理解するかにより、習得すべき徳の理解についても相違が生じる。教父たちは枢要徳にキリスト教的基礎を与えるだけでなく、枢要徳に係る議論を通じて、キリスト教的視点から見た新たな人間観を提示しようとしているとも言えるだろう。

人間をどのように理解するか、仮に「キリスト教的人間像」と言い得るような一つの理念が存在したとしても、それをどのように説明するか、その道具立ては当然、時代や地域によって異なってくる。とりわけ『ニコマコス倫理学』をはじめとするアリストテレスの諸著作の本格的受容が生じた13世紀、西洋は枢要徳と再び向き合うことを余儀なくされたといえる。なぜなら、アリストテレスの倫理体系においては、枢要徳を構成する四つの徳目は、必ずしも中心的なものとして位置づけられていないからである。12世紀の枢要徳理論を経て、トマス、ボナヴェントゥラ、スコトゥスがいかに枢要徳を捉え直していったのか。「スコラ学における枢要徳の発展」を考察するのが、2020年度のシンポジウムの課題である。

2019-20年度シンポジウム企画委員：

藤本温，松村良祐，山田庄太郎（文責）